

心理臨床家が空想することの 意味についての一考察

中 谷 桂 子

はじめに

心理療法の空間では、クライアントとのやり取りから、なんらかの刺激を受けて心理臨床家自身も空想が喚起される。そこにはそのときのクライアントとの相互交流や心理臨床家の自己状態が大きく影響し、さらに空想が生起される際には刺激の有無、意識的であるのかそうでないのかという違いが存在する。そのような空想は個人の内的世界で起こる極めて私的なものであり、その内容は他の誰にも知られることがない。そのため、実際にどのようなことがどのようなタイミングで起こっているのかを実証することは困難である。しかし、空想が湧き起るプロセスはクライアントとの関係と切り離せるものではなく、あるクライアントとの間では生じない空想が別のクライアントでは活発に生じたり、そのタイミングに空想が生じる可能性は二者の関係性や文脈によって変化したりすることがある(Bacal, 2006)。

そもそも空想は意識的にも無意識的にも生じるため、意識過程のどこに空想を位置づけるかについて、研究者の中で一致した見解を見出すことが困難である(松井・小玉, 2003)。また心理療法では、大きく分類すると空想を価値のあるものとして用いるのか、価値のないものとして取り扱わないのかという2通りの態度があり、前者の立場の一つである精神分析学派においては、心理臨床家の空想は一般的には逆転移の一部としてみなされている。そこでまず本論文では、空想することとはどのような状態を示すのかについて述べたうえで、次に、精神分析的心理療法において¹⁾治療者の空想をどのように捉え、そこにどのような治療的意味を見出しているかを検討し、その特徴的な視点と問題点を検討する。そして、心理臨床家が心理面接の中で空想することによって何が起こっているのか、空想することがもたらす影響からその意味を考察し、心理臨床家が空想することがもたらす機能を探索したい。

1) 精神分析に関する記述については「心理臨床家」ではなく、精神分析において使用する「治療者」「精神分析家」「分析家」などと表記している。

1. 空想することとは

誰かの話を聞きながら、その経験がどういうものなのかとあれこれ思いを巡らすようなことは日常よく行われていることである。また、現実には叶わないようなことを空想することや、新しい仕事に就いている自分をイメージすることなどは、誰もが経験することかもしれない。人がさまざまな空想をするとき、その目的が明確であることも、無目的に突然生起されることもあるといえよう。

空想には、他者の経験を共感的に理解しようとする情動的な側面 (Davis, 1983) や、現実のリハーサルとしての機能 (Singer, 1966/1975) があり、創造的な何かを作り出すことや、感情の調節や未来を考えることに貢献している (Person, 1995/1997)。すなわち、空想の目的を一言で表現すれば、人が生きていく上での主要な適応方法のひとつと言えるかもしれない。一方で空想は、空想にふけるというように「神経症的白昼夢と同義」 (Rycroft, 1992/1968) でもあり、逃避、補償、フラストレーションの解消 (Alain, 1926/1941) を目的として行なわれることがあり、それらが行き過ぎてしまうと不適応となることもある。

また、空想はどこまでを空想とするのかその範囲が明らかではない。Bergson (1934/2013) が、人間の経験をメロディーに喩え、メロディーから一つの音を取り出すとメロディー自体が成立しないと述べていることは、空想するという経験にも該当するといえよう。空想するという経験は、次から次へと生起される空想の「連続性」をもとに捉えられ、その「連続性」にシステムや意味を見出したり、また他者との相互交流が「空想」のプロセスに影響を与えたりしながら、一つのメロディーが浮かび上がるのではないかと思われる。

1-1 心理臨床家にとって空想することとは

心理臨床家は心理療法の空間で、空想することをどのように経験しているのか。日常場面との違いで言えば、心理療法では治療関係を維持するために決められた時間や場所という枠組みの中で面接が行われるなど治療構造が設けられており、その中で心理臨床家はクライアントやケースについて思いを巡らすことに動機付けられている。つまり、その場に集中することにより、とりとめもない空想でさえよりクリアに感じるときがあるのかもしれない。心理臨床家が空想することによって、そこで何が生じているのかを明らかにしていきたい。

空想の概念は多義的であり、研究者がどの観点から「空想」を捉えるのかによってそれぞれに定義づけられるといえよう。ここで、面接場面で心理臨床家が空想するという行為を論じる上で、「空想」を定義づけることとする。

広辞苑によれば、「空想」とは「現実にはあり得るはずのないことをいろいろと思い巡らせること」 (新村, 2008) とされている。この空想の意味には、根拠のないことや現実を超えるような広い範囲の「創造」という「独自性」と、自由で制約のない心的活動の「連続性」という2つの要素があると思われる。心理臨床家の面接場面における空想体験

は、その「空想」の「独自性」とさまざまなことに思いを巡らせる「連続性」によって成り立っているのではないかと考えられる。

「空想」の「独自性」は、現れたその内容が特殊であるかどうかより、たとえごく一般的なものであっても、なぜその内容がそのタイミングで立ち現れるのかを含め、心理臨床家にとって特別な意味のあるものとしてその「空想」が捉えられるところに存在すると筆者は考える。藤岡（1983）は、空想によって生じるイメージは「そのイメージであることの「独自性」と、同時に、そのイメージであるとわかるための「模写性」を持っている」と述べている。イメージには二面性があり、「独自性」はイメージに独自の意味づけをする側面であり、「模写性」は知覚に基づいた側面として考えられ（藤岡，1983）、何かを想起するための想像²⁾ではイメージの「模写性」が優先されるのに対して、「空想」は「独自性」が強調される（松下・村上，2010）。つまり、この空想によるイメージの「独自性」は、現実世界を知覚し模写することより、個人の精神内界における意味づけの作業に注目するものであると考えられる。また、その意味づけは周囲の状況という文脈の全体との関連において、そのつど変化するものであると思われる。

ここで整理しておきたいのは、イメージの「模写性」が優先される想起という心的作業においても「独自性」が優先されることがあるかどうかである。面接場面では、心理臨床家はさまざまなことを想起することがある。例えば、その日のクライアントの印象がいつもと違うと感じた際、それが何に由来しているのかとクライアントのこれまでの印象を手繰り寄せるために、クライアントの髪型や着ていた洋服を思い起こそうとするかもしれない。以前のクライアントの語りやクライアントについて考えた心理臨床家自身の記憶、あるいは、クライアントとよく似た自身の経験や別のクライアントのことが思い出されることもあるといえよう。このようなさまざまな想起の対象によっては、「独自性」が優先されることがあると考えられる。そもそも心理療法では、心理臨床家がクライアントとの関係においてクライアントをどのように捉えるのかという部分が治療に大きく影響を及ぼす。クライアントの言動への意味づけに関わる想起には心理臨床家自身のイメージの「独自性」が強調され付加されると考えられる。以前のクライアントの髪型や洋服のような想起の対象は模写性が優先されるのに対して、クライアントの語りや心理臨床家自身が考えたことなどは曖昧であり、分からなさを補完する作業として、心理臨床家の意味づけの「独自性」が強調されることになる。このことは、記憶の想起自体ではなく、想起を基盤として空想

2) 「想像」は、「実際に経験していないことをこうではないかと推しはかることや現前の知覚にない物事を心に浮かべること」（新村，2008）である。「実際に経験していないこと」や「現前の知覚にない物事」の中には、「現実であり得るはずのないこと」が含まれることから、「空想」と「想像」の意味が重なることが示唆される。また、「空想」が「思い巡らす」ものであるのに対して「想像」は「推しはかる」というように目的意識を持っているところが違いとして考えられる。また、「空想」は「想像」の一種（新村，2008）として捉えられることもある。木下（1999）が、「（空想とは）現実に対する合理的思考が弱まり、願望充足など無意識的側面が現れやすいという点から、想像と区別されることもあるが、それは相対的な程度の違いであり、発達的にも両者は区別されるものではない」と述べていることから、両者の境界は曖昧である。

が構築される (Freud, 1900/2011) という捉え方で空想を位置付けるとすれば、想起そのものは模写性が優先されるため「空想」には含まれず、想起に伴って空想することにより「独自性」が付加されるというようにも考えられる。

一方、「空想」の「連続性」は、心理臨床家の思いを巡らすというその心的作業の範囲が不明瞭であり、時間の流れの分割が不可能であることから、空想の特徴的な要素であると考えられる。「連続性」と「独自性」は独立して捉えられるわけではなく、メロディーのように音の「連続性」によって「独自性」が表現されることもあるといえよう。例えばあるクライアントとの面接場面では次から次へと空想が現れたり、あるクライアントではそのテンポがゆっくりであったりと、空想の連続する方法の違いが「独自性」として捉えられる。また「独自性」は、このような「連続性」の違いも含めた文脈の中に存在すると考えられる。

1-2 空想と空想すること

本節では心理臨床家が空想することを経験として捉え、何が生じているのかを考察したい。そこで、臨床の中で生じている空想するという行為を「アクチュアリティ」という一つの視点から捉えてみたい。「アクチュアリティ actuality」は現実という意味を表す言葉であり、文学・社会学・哲学などの人間科学のさまざまな領域で使用されている。その中でも木村 (1994a; 1994b; 1997a; 1997b/2001) は、「アクチュアリティ」についての論考を重ね、詳細な記述をしている。木村 (2015) は「リアリティ」との比較によって「アクチュアリティ」とは何を表現しているのかを以下のように述べている。

アクチュアリティ actuality というのは、英和辞典を引いてみると「現実」「現実性」などの訳語がでてくるが、同じ訳語を持っているリアリティ reality と比べると、「現在」とか「目下」とかの時間的な意味が強いという非常に顕著な特徴がある。アクチュアルという言葉は、「行為」「行動」を意味するラテン語の actio (英語では act) から来ていて、現実に対して働きかけている現在進行形の行為、あるいはそのような行為を触発している現実に関して言われる言葉である。一方、リアリティ reality はラテン語で「もの、事物」を意味する res から来ており、主として対象的に認識可能な事物側の事実存在 (実在) を表すわけで、認識が完了して事実が事実として確認されなければリアリティとはいえない。

木村 (1994b) は「リアリティ」と「アクチュアリティ」を「もの」と「こと」の対比と重ねており、「「もの」が名詞で名指せるのに対して「こと」を述べるのには動名詞的な表現が必要なのもそのためである」と述べており、両者の特徴がより分かりやすいものになるといえよう。この「リアリティ」と「アクチュアリティ」の意味の区別から、前者は「空想」そのものとして、後者は「空想すること」に対応したものとして捉えられるのではないかと考えられる。「空想」の場合は、「〇〇の空想」というように心理臨床家の認

識が完了することによって実在するものになるため、「リアリティ」に対応していると考えられる。さらに、「〇〇の空想」というように対象化されることによって、他者と共有されうるものになり、「公共性」が生じる。一方、「空想すること」は、「アクチュアリティ」という視点で捉えられる。心理臨床家が心理療法という時間の流れの中で空想することには、クライアント理解、クライアントへのコミットメント、あるいは心理臨床家が自分自身をよい状態に保つための自己調整としてなど、多くの動機が想定される。それらは、今その瞬間に現実に対して働きかけている行為であると考えられる。また「空想すること」は、心理臨床家の内的作業が静止することなく生成し続ける現在進行形の状態を示すものでもある。「空想すること」は絶えず変化し続ける空想の「持続性」³⁾の上に成り立っているものであり、心理臨床家がその時その場を「主観的」に経験するものであり、「客観的」に捉えることはできない。これらの「空想」と「空想すること」の特徴を「リアリティ」と「アクチュアリティ」という視点から整理してみたい(表1)。

表1 空想と空想することの区別

	空想「リアリティ」	空想すること「アクチュアリティ」
時間の流れ	過去形 完了形	現在進行形
空想の性質 と意味する もの	空想の内容 空想への意味づけ 空想の形態(視覚・聴覚・触覚な どの感覚の種類) (客観的, 実在, 公共性)	クライアントへの関与(現実性)(当事者性) クライアントとの言語的・非言語的コミュニ ケーションによる刻一刻と変化するプロセス (関係性)(持続性) 心理臨床家自身の感覚(主観的)

空想」と「空想すること」の区別によって強調されるのは、面接場面でクライアントとの関わりの中で生じていることが「アクチュアリティ」の視点を抜きにしては語れないということである。心理臨床家はクライアントの話を聞いたり対話をしたりしながら、クライアントの感情や経験に思いを巡らす。次々と変化する心の動きは心理臨床家が通常経験するものであり、それは心理臨床家としてごく普通の営みであるのかもしれない。しかしそこには、上記の木村の「アクチュアリティ」という言葉に含まれる「関係性」「持続性」「当事者性」などの要素が存在しているものと考えられる。その意味では、面接場面において心理臨床家が「空想すること」は、クライアントと心理臨床家がともにいて生じるものであり、目の前にいるクライアントの影響を受けながら浮かび上がる心理臨床家の空想は、クライアントと心理臨床家の二者の関係から創り出されるまさに「アクチュアリティ」だといえよう。

3) 1-1で「空想」を定義づける際に使用した「連続性」と、「空想すること」をアクチュアリティから捉えた際の「持続性」は、意味の上では重なるものである。「空想」は「〇〇の空想」の次に「〇〇の空想」が出現するというように、それぞれが独立したものとして捉えられ、それらが連続して出現することから「連続性」を使用し、「空想すること」は行為として持続しているため、「持続性」とした。

クライアントと心理臨床家のやりとりは現在進行形の行為であり、この両者のやりとりを外側から見ていただけでは心の動きを感じ取ることはできない。小林（2015）はこの「アクチュアリティ」について「現時点で途絶えることなく進行している現実を意味し、それは活動に関与している当事者が自らの活動によってしか対処することができない性質のもの」であると述べており、クライアントと心理臨床家が心理療法という活動に関与することでしか、変化し続ける現象を捉えることはできないことを意味していると考えられる。木村の言う「アクチュアリティ」とは、まさしく両者の関わりから刻一刻と生み出されるものであり、西（2015）は「アクチュアリティ」を「両者の共有しうるリアリティ」でもあると述べている。「アクチュアリティ」は関係性のなかで展開していくものであり、これはまさに心理療法の面接場面で生じていることに当てはまる⁴⁾。

一方、「リアリティ」の視点から示されるのは、心理臨床家が空想をどのように認識したのかという側面である。それらは空想することによって常に更新されていくものであり、現実に向かって次の一瞬に働きかける「アクチュアリティ」によって支えられているといえよう。また、認識された「空想」からその内容を吟味する中で、視覚イメージの変化のプロセスを追うことや、あるいはその「空想」がどのタイミングで生じられたのか、その際クライアントは何を語っていたのかなどの想起により、「空想すること」によって生じるものが明らかになることもあると考えられる。

木村（1994b）は、「モノ」（＝リアリティ）と「コト」（＝アクチュアリティ）の対比は単純な二元論的な二項対立でなく、両者の領域がきれいに分かれているわけでもなく込み入ったものであると述べている。「リアリティとアクチュアリティの二重現実」（木村，1994b）が「空想」と「空想すること」にも該当するように、「空想」と「空想すること」は複雑に込み入っているといえるだろう。例えば、空想した内容を振り返った際、余韻のようなものとしてアクチュアルな感覚がそこに含まれていることもあり、また、掴み所のない空想では何かを感じ何かを空想したはずが認識できないこともあるかもしれない。つまり、空想そのものに事後的に生き生きとした「アクチュアリティ」として感じられることもあれば、「アクチュアリティ」として何かを感じていたはずが、「リアリティ」を捉えることができないようなこともあるといえよう。したがって、心理臨床家が空想することで何が生じているかを知るには、それらを具体的に見ていく必要があると考えられる。

4) 皆藤（2007）は、「アクチュアリティ」を真実と訳して使用している。心理臨床家が心理療法において三つの「実」の世界を生きており、一つ目の「事実（fact）」は日付や場所など人が共通して認識する世界であり、二つ目の「現実（reality）」はクライアントが生きていく中で体験する世界であり、三つ目の「真実（actuality）」は心理療法においてクライアントと心理臨床家の間に生まれる世界であると述べている。皆藤は、親子並行面接における「事実（fact）」に該当する情報交換がいかなる意味を持つのかと問いかけ、それらは「真実（actuality）の世界」とはほど遠いように思うと締めくくっている。皆藤の例で言えば、子どもが自分のことを黄金バットだと空想するとき、そこには事実ではなくクライアントと心理臨床家の関係があるからこそ語られる真実というものがある。

1-3 空想することにより生じるアクチュアリティ

心理面接は時にセッションと呼ばれることがある。音楽のセッションのように即興で、どのような対話がクライアントと心理臨床家で創り出されるのかその先が見えない。しかしメロディーのようにあるまとまりを作りながら展開していくものでもある。そこには、楽器のように音を奏でていない時と同様に発話がない時も含めて、絶え間ない両者の相互交流によって間主観的な時間が流れる。

その中で心理臨床家が空想するタイミングを考えると、それは面接場面でその必然性があるからこそ心理臨床家が空想するのもかもしれない。それらはあまり意識されはしないものの、そこには何らかの刺激が存在することがある。例えば、クライアントの語りや顔の表情などの刺激が一般的なものとして考えられる。また、クライアントの言動以外にも、急に雨が降り出したり、パトカーの音が聞こえたり、あるいは部屋の空気感や椅子の座り心地などから何かを感じたりと、環境の変化や心理臨床家自身の感覚が刺激になることもあり、その刺激に対しての反応として空想するという行為が生じることがあると考えられる。

そもそもクライアントは、心理臨床家が空想していることもその内容も、心理臨床家が語らなければ知る由もない。同様に心理臨床家においても、クライアントがどのような空想をしているか、そのことについてクライアントが語らなければ知ることはない。しかし両者が空想することが、それぞれに影響を与えあう相互的なプロセスが面接場面では生じており（岡野，1999）⁵⁾、それはクライアントが自身の空想の何をいつ語るのかという言語的相互交流に限られたものではない。心理臨床家が空想するその状態は顔の表情やジェスチャーに表現されることもあると考えられる。例えば、それは心理臨床家が空想する際に、視線をやや斜め上に向けて視覚イメージを思い浮かべることや、クライアントの心の痛みを感じて顔を歪めるようなことである。それらの一瞬一瞬に心理臨床家がとる行為が、今度はクライアントに影響を与え、その影響を受けたクライアントの行為に心理臨床家が反応するという相互交流は、生き生きとしたアクチュアリティの表現として捉えられよう。つまり、心理臨床家が空想することは、目立たずにクライアントとの非言語的相互交流にも影響を及ぼしていると考えられるのである。

木村（1994a）は、「生き生きとした現在」は「生きものとして絶えず行為している人間の現存在が、やはり絶えず変転している世界と生命的・行為的に出会い続けている接触面に成立する」と述べている。心理臨床家が空想することは、面接が行われる環境への接触

5) 岡野（1999）が述べているのは患者と分析家それぞれの自由連想についてであり、空想ではない。連想は「一つの観念につられてその関連のある他の観念を思い出すこと」（新村，2008）とされており、何らかの刺激があり関連のあることが思い浮かぶというものである。この刺激とは言葉の刺激に留まらず、五感からも生じるものである。思い出すということは記憶と関係があり、その記憶と接近、類似、あるいは対立の関係を保っている他のことを考えることによって促進される。空想には「いろいろと思い巡らすこと」が意味に含まれており、この思い巡らす行為は一つの観念から他の観念を思い出すことでもあり、連想は空想の一部だと筆者は考える。

も含め、クライアントとの関わりの中でその都度展開していくものであると考えられる。そして、このような空想する行為は、そのタイミングにおいて過去と未来を媒介するものとして湧き起こってくるのではないかと考えられる。その一瞬とは、心理臨床家の心身の記憶としての過去の集積と未来の予測が集約されて、その中からその時必要なものが、空想として生じるのではないと思われる。

ここでさらに、時間的な意味合いの強いアクチュアリティという言葉をもとに、心理臨床家が空想することを心理臨床家の感覚の関与、そして心理臨床家の自己調整という2つ視点からクライアントとの相互交流のプロセスを捉えてみたい。

1-3-1 空想することと感覚

空想はなんらかの感覚を感じているが言語化やイメージ化ができない状態、あるいは感覚がまとまりをみせるまでのプロセスを経て生起され、さらに空想する際にはさまざまな感覚を動員する。この感覚の中心となるものは視覚であり、それは目の前のクライアントの表情や立ち振る舞いなど実際の外的な視覚情報だけでなく、クライアントの語りから心理臨床家が視覚イメージを用いてクライアントの状況や経験を思い浮かべるという内的作業が空想を発展させていくと考えられる。

Merleau-Ponty (1945/1974) は「感覚することについて」、感覚するものとされるものの一方が他方に感覚を与えるということがなく、感覚されるものが感覚するもののなかに侵入することでもなく、感覚するものの身体と共時化して初めて感覚が成立すると述べている。クライアントの仕草を目で追う心理臨床家の視線の動きや、クライアントの語りに耐えられず胸が痛むような感覚は、身体を通して感じられるものである。「感覚」には五感以外に前庭感覚（重力方向の感覚）や内臓感覚があり、これら全ては身体感覚に繋がるものである。クライアントの行為を理解する際、それは視覚関連領域だけで成立するのではなく、行為の照合をおこなうミラーシステムによって視覚が運動とマッチングしてはじめて理解されると言われている（乾，2009）。つまり共感に必要な空想は、自身の身体感覚を通してこそ生成されるものであると考えられているのである。しかし、心理臨床家の空想が、必ずしもクライアントの状態を忠実に反映しているとは言い切れない。むしろ空想には心理臨床家自身の意図や意味づけに左右される側面があり（藤岡，1983），その点に気づいたとすれば、そのギャップが重要な何かを示唆していることも考えられる（岡野，2013）。また Deleuze (1981/2004) が、「感覚」を体験するには「感覚」を感じるものと感じられるものが統一に近づくしかないと述べていることから、心理臨床家が「感覚」を総動員して生起するような空想には主体と客体が融合する動きが生じ、両者の境界が曖昧になることも考えられる。そこでは心理臨床家は、自身の個性を見失い、心理臨床家としての機能を果たせなくなるリスクが生じることも考えられる。心理臨床家が自分自身の反応の意味をクライアントとの間で考えていくために、心理臨床家自身の空想が使用されることが必要である。心理臨床家の空想が治療に貢献するには、クライアントとの自他融合的な状態を超えた後に、心理臨床家が再び個性を取り戻し、自身の空想体

験を再吟味することが重要である。また、心理臨床家が自分自身の空想に惹きつけられ、クライアントは放ったらかしにして自身の豊かな世界が広がり、そこに入り込んでしまうということもあるかもしれないが、そうすると、クライアントはその素材を提供する側になってしまう（神田橋、1992）という立場の逆転が生じる危険性がある。

1-3-2 空想することによる自己調整

心理臨床家が、その時そのタイミングにおいて空想することに必然性があるとすれば、空想することの動機の一つとしての自己調整は、クライアントと共に両者の間で絶えず生じていることである。そして、アクチュアリティの時間的意味に含まれる現在進行形の行為として捉えられるだろう。ここで、Beebe & Lachmann (2002/2008) による相互交流のシステムモデルから空想することによる自己調整について述べたい。相互交流のシステムモデルでは、クライアントと心理臨床家は両者のやり取りを維持するために相互交流調整を行い、それらに影響を受けてそれぞれの自己調整が使用される。また、自己調整プロセスを維持するために相互交流を使用するという、絶え間ない交互的な影響が生じるとされている。システムモデルの相互交流理論には言語的（明示的）相互交流と非言語的（黙示的）相互交流の2つの領域があり、非言語的相互交流には顔や発声、空間的向きなどが含まれる。このシステムモデルによれば心理臨床家が空想するという行為は、非言語的相互交流調整プロセスが自己調整を促進するモードに入っていくことによって生起される。自己調整には相互交流調整の側面があり、その一つとして自己調整のために空想をすることはお互いの関係を柔らかに調整することに貢献していると考えられる。それは、セッションにおいて同じ場所と時間を共有しながら、クライアントと心理臨床家が空想することによる非言語的相互交流が、対話的なものを成立させるために必要な条件となるからだと考えられる（Buber, 1923/1978）。また、対話の中に空想が挟まっていくことによって対話が促進していくことがある。そして、空想する方法によっては、心理臨床家の情動を調整することや、自身の覚醒水準を調整することもあり、それらがクライアントとの相互交流調整に影響を及ぼすことになる。何かを空想することがダイレクトな変化を促すわけでもなく、また空想をすればそれが治療的であるというわけではない。それでも、空想することはクライアントと心理臨床家の関係の安定性に貢献する可能性が示唆されるのである。

2. 精神分析における空想すること

精神分析における空想の概念はクライアントの空想の内容が示す意味や特徴に重点が置かれ、心理臨床家がクライアントの内的世界を理解するために用いられ、面接場面の心理臨床家自身の空想にそれらを当てはめることは考え難いといえよう。心理臨床家自身の空想は、一般的には逆転移と捉えられることが多い。また、心理臨床家の空想そのものに注目するのではなく、空想をどう位置付けるかによって逆転移と見なされるだけでなく、空想はあらゆる心的作業のプロセスに関係しており、さまざまな観点で捉えられてきたと考

えられる。例えば、空想はプライベートな領域でもあり治療者の抵抗が表現される方法の一つであるという見方 (Greenson, 1967) や、空想は願望が明示されるとともに防衛が表現される過程でもあるという視点 (Witham, 1999)、空想は、経験の構成を具体的な知覚的イメージに描き、心理的機能の領域を補助するものであるという考え方 (Stolorow & Atwood, 1989) などの観点が見られる。抵抗や防衛のみならず、クライアントへの共感を促すものとして、心理臨床家がイメージを広げていくために空想を使用すること (Berger, 1987) や、投影同一化によって空想が活性化されることも考えられる。それらは逆転移と区別されることも、区別されないこともある。

本節では、空想するという個人の営みの本質的な部分を理解するうえで、まずは精神分析における空想の概念を取り上げ、その変遷を辿っていききたい。また同様に、広がりを見せている逆転移の概念においてもその変遷を辿っていくこととする。理論に裏付けられた空想や逆転移の概念は、空想の機能や空想の意味、あるいは空想の志向性を明らかにするものになると考えられる。それらは前節で取り上げた他者と共有できる客観的な「リアリティ」に対応するものであり、そこに「アクチュアリティ」を見つけ出すことが、心理臨床家が空想することを理解する上で必要になってくると考えられる。

2-1 精神分析における空想の概念の変遷

精神分析の創始者である Freud の空想の概念を最初に論じ、無意識的空想を強調した Isaacs、そして「空想すること」という動名詞を使用した Winnicott を取り上げ、空想の概念の変遷を辿ってみたい。

2-1-1 Freud における空想の概念

Freud は空想という言葉を自身の著作ではさまざまなところに使用していた。しかし、「個々の空想は、いずれも欲望成就」(Freud, 1908/2007) であり、「夢は欲望成就」(Freud, 1900/2011) であるというように、空想は夢との類似性によって述べられているものの、空想の概念を特に明示はしていない。そこでは空想という言葉の使われ方は曖昧であり、どの意識レベルでどのような観点から捉えているかを読み解くには注意が必要となる (藤山, 2002)。

意識レベルでの概念の変化を捉えると、Freud はその初期の著作では空想 (幻想) は程度の差こそあれ意識されたものであると述べているが (藤山, 2002)、その後は無意識的な意味で使用されることが多くなっている。無意識的空想が大きな役割を果たすようになるのは、1897年の「性的誘惑説」から「内的欲動説」への転換であり、これはヒステリー患者の語る幼児期の大人からの誘惑が空想であったというところからのものである (Freud, 1887-1904/2001)。また、Freud は「空想は原光景の記憶への接近を阻止するために築かれる心的な前部建築物」(Freud, 1887-1904/2001) であり、同時に空想は「体験されたことと聞かれたことを、過去の出来事を自分自身が見たことと組み合わせる」機能を持ち合わせていると述べている。また、幼児期の想起には空想の創作が関わっており

(Freud, 1899/2010), 新宮 (2010) によれば「遮蔽記憶は後にフロイトがしばしば論じた「過去に遡っての空想」に関連している」。

こうして Freud の思考は欲動理論を再編させて大きく転回したが、その理論的変動を生み出したプロセスに空想の概念は媒介的で中心的な役割を担っていたのである (総田, 2001; 藤山, 2002)。これは1890年代までの機械論的な見方と、『夢解釈』(Freud, 1900/2011) で確立された意味の解釈との齟齬 (総田, 2001) の間に見られる。また, Freud は (1900/2011) 空想の大部分が幼児期体験に基づいていることなど夢との類似性から述べるだけでなく、夢内容から夢形成に参与する第4の契機として位置付けられている「二次加工」において、空想が夢にどのように現れるのかについても論じている。「空想がほとんど抑圧を受けないまま夢内容あるいは少なくとも夢の門構えを形成している場合から、空想は単に、その中の一要素またはその要素への遠い仄めかしによって、夢内容において代表されているという場合まで、移行がある」というのである。そしてそれらは、「夢を理解するための鍵を提供する」ものとなる。

その一方で, Freud (1908a/2007) は白昼夢には意識的な空想と無意識的な空想があり、意識的空想が無意識的空想に変化してしまうと、それは病理的なものになることもあると述べている。また、無意識的空想には、「無意識のうちに形成されたものであるか、かつては意識的な空想ないしは白昼夢であって、その後意図的に忘却され、「抑圧」を通して無意識的になったもの」(Freud, 1908a/2007) の2通りのものがあるとされている。

それからまた, Freud (1908b/2007) は空想の特徴として、空想が過去・現在・未来という時間的契機の間を漂っていることについても論じている。まず、空想の目的としての欲望を呼び覚ますことになった現在のなんらかのきっかけから始まり、その欲望が成就されていた過去の体験へとさかのぼり、最後にその欲望の成就した姿としての未来のある状況を創り出す、それが空想であるというのである (Freud, 1908b/2007)。

Freud (1907/2007) は、「空想は抑圧された思い出の代替物であり薬」であり、思い出をそのまま思い出すことを「抵抗が許さない」と述べている。しかし、その後狼男の症例 (Freud, 1918/2010) では、空想が単に抑圧されたものというだけでなく、幼児の体験を構造化する機能を担ったものと認識されるようになっていく。つまり、「当初単に抑圧される性的内容を持った空想であったエディプスコンプレックスや去勢不安は、とりわけ「狼男」の症例研究を通じて、現実の体験を構造化する図式という機能を担うものと見なされるようになった」(総田, 2001) ののである。これは、エディプスコンプレックスのような図式は、個人的体験に打ち勝つために、現実の体験が折り合わない時に、その体験を空想の中で加工することによって構造化につながるというものである (Freud, 1918/2010)。

このように Freud は、随所で空想について論じており、そこには夢との類似性ととともに空想の機能とその意義を見出していたものと考えられる。

2-1-2 Isaacs の幻想論

fantasy が空想であり phantasy は幻想であるという⁶⁾二分法によって、精神分析用語と

しての無意識的空想を phantasy として強調したのが Klein 学派の児童分析家である Isaacs (1952/1979) である。Klein は子どもの分析を通して、子どもが遊びの中で幻想を表現することに気づき、幻想をありのままに解釈していくことが治療を進める上で有効であると考えようになった。それは、解釈によって演じられた幻想が、現実への認識へと向かうというものである。Isaacs (1952/1979) は、Freud が「力動的な心的現実を発見したことが、心理学的な理解の新しい時代を開いた」と述べている。精神分析ではこの心的現実を無意識的空想と概ね重なる術語として扱っている（総田，2001．藤山，2002）。Isaacs (1952/1979) によれば、Freud は英国における空想 fantasy と幻想 phantasy の区別を用いてはおらず、また Freud が使用した Phantasie は「両者の接点で流動的に使用された言葉」（北山，1979）になっている。英国におけるそれらの区別は、そもそも「フロイトの著作が英語に翻訳されたとき、その言葉の精神分析的な意味を明確にするため」に採用されたものである（Isaacs, 1952/1979）。しかし、Isaacs の提案した空想と幻想との二分法は、ある程度受け入れられてはいるものの、必ずしもそうであるとは限らない（藤山，2002）。

そのような空想と幻想の二分法は、精神分析用語としての無意識的空想を強調する、あるいは拡張するためのものであり、これは Klein 学派の治療が空想の分析を主要な仕事のひとつとしていることを表現しており、現在にもつながる理論的根拠として大きな影響を与えている（北山，1979）。

2-1-3 Winnicott による空想すること

精神分析の中の独立学派は、古典的な Freud 派と先に述べた Klein 学派の間で揉まれて独自性を主張しようとしたという歴史的経緯がある。Winnicott は Klein の影響を受けながら、自身の考えを確立してきた。空想をどう扱うかという点で言えば、Klein は無意識的空想を言葉で解釈することによりクライアントの不安を軽減しようとしていたのに対して、Winnicott は解釈することよりもむしろ治療状況の設定の方が重要であると考えていた（館，2013）。Winnicott は母子の臨床を通して環境が与える影響の大きさを感じていた。子どもの内的世界を解釈によって説明することより、子どもにとっての抱える環境を提供することが一番重要であり、その環境を提供することが設定であるというのである。時間や空間の設定に始まり治療者の在りようもそこには含まれる。

小児科医として多くの子どもたちを診察し、子どもの精神分析を行う児童分析家であった Winnicott は、一見すると遊びを通して積極的に空想を活用しているというような印象を我々は抱きがちである。しかし、北山（2004）によれば、Winnicott は「現実から乖離したものになりやすい」欲望成就のための空想については、「一般的には評価しない傾向」

6) 英語圏では「空想」を意味している fantasy は「幻想」とも訳されることがあり、「錯覚」を意味する illusion も「幻想」と訳されることがある。つまり、「幻想」の示している範囲は「空想」と重なる部分から「錯覚」まで広範囲であると捉えられる。「空想」との比較で言えば、「幻想」では意識過程の中での位置付けが、より無意識的であるが、「空想」にはより意識的な部分も多く含まれているものと考えられる。

があり、役に立つものではないと考えていたようである。それらは、Winnicott が空想を躁的防衛や解離という観点から捉えていたことに由来している。躁的防衛について Winnicott は、初期の論文の中で空想と内的現実の違いや両者の関係を、次のように述べている。空想の本質が外的な現実を全能的に自分の都合のよいように操作することにより、そのためクライアントにとって空想が内的現実を避けるために使われることがある。すなわち、空想は外的現実に向かって内的現実を逃れるための躁的防衛の初期症状であるというのである (Winnicott, 1935)。また、Winnicott (1971/1979) は、解離について論じる中で、空想という名詞ではなく空想すること *fantasying* という動名詞を用いて、空想することとはどういうことなのかを具体的に述べており、「空想すること」は現実検討を受ける可能性もなく、解離された状態で起こる現象であるとしている。夢や生活に伴う多くの感情は、抑圧されがちであるのに対して、空想することは解離と関係があるというのである。Winnicott の言う解離とは、「本当の自己と偽りの自己、あるいは精神身体的存在と知的活動との解離」(橋本, 1979) である。「本当の自己」を Winnicott は、「反応することには巻き込まれず、それで存在することの連続感を保存する (Winnicott, 1955-1956,)」としており、それはつまり主観的で内的な経験をする主体としての自己であり、一方、偽りの自己は環境に適応するために作られたものである。

Winnicott (1941) が、空想が解離せずに治療的に機能している例として挙げているのは、舌圧子ゲームという言い方で示している乳児の遊びである。大きな部屋で母親の膝の上に子どもが座るなど一定の設定があり、この舌圧子ゲームには、乳児は舌圧子に興味を示すがそれを抑制し、その後舌圧子で遊び出し興味を失うまでの一連のプロセスが生じるとされている。乳児が舌圧子で遊ぶプロセスは、身体的であるとともに精神的なものであり、空想と身体の反応が解離せずに結びついている (館, 2013)。Winnicott によれば、空想が治療的意味を成すための条件には、空想によって解離が生じないことが前提ではあるが、舌圧子ゲームで示されることとして、乳児の空想が許容される環境が設定の中に含まれていることも重要な要素であり、また、外的世界に限界があることをそれらの経験を通して知ることにもなると考えられるのである。

2-1-4 Winnicott と Freud や Klein 学派との比較

Winnicott の空想することを Freud や Klein 学派の空想と比較してみると、内的現実と空想との関係や、その捉え方に違いが見られるように思われる。前述したように Freud はいわゆる心的現実あるいは内的現実と無意識的空想は概ね重なる概念であるとしている。Freud の心的現実の発見を強調し拡張していった Klein 学派ももちろん同様に捉えている。一方 Winnicott は、空想と内的現実の両者には違いがあるとしている。先に述べたように、空想することで外的な現実を全能的に自分の都合のよいように操作し、内的現実を避けるというのである。

また、その違いは、白昼夢や夢についての捉え方の違いにも表れている。Winnicott は空想することの問題を解離との関係で述べており、空想の一形態である白昼夢についても

解離という観点から捉えている。小此木（2003）によれば、この解離という概念は Winnicott 独自のものであり、Klein の分裂（splitting）の概念に理論上対抗する意義を持っているとされている。

Freud は白昼夢と夜に見る夢が欲望成就と同様の目的を持っており、それらは抑圧されたものであると考えている。前述した通り Winnicott は、夢は抑圧と関係があり、空想することは解離と関係があると述べており、解離が生じていると空想は「創造的ではなく薄っぺらなものとなるため、扱う気になれない」（Winnicott, 1971/1979）と考えていた。Freud や Klein 学派が無意識的空想の中味に精神分析的な治療に関係する、尽せぬ素材を見出したことと比べると、そこには大きな違いが見られる。

さらにもう一つの違いとして考えられる視点として、母親と乳児の相互関係における乳児の空想を Freud や Klein 学派は乳児の精神内界で生じているものとして捉えているのに対して、Winnicott は二者の相互関係論的な「錯覚」と呼んでいる点である。Winnicott は、乳児は外的現実と内的現実の中間領域において「遊ぶこと」によって「錯覚」から「脱錯覚」へと進んでいくものと考えたのである。乳児はこの人という個体の主体性を重視した Freud の欲動論に対して、人は関係の中に生きているという関係論が Winnicott の基盤になっているという違いが、Freud は空想を内的現実と捉え、Winnicott は空想を錯覚と捉えた要因となっているのではないかと思われるのである。

2-2 精神分析における逆転移の概念の変遷

2-1-4 で論じた Winnicott の関係論的な空想の概念と並行して、逆転移の概念も大きく変化している。逆転移の概念の変遷を辿り、その中から前意識の層における逆転移を取り上げたい。

2-2-1 逆転移の概念の変遷

Freud が最初に逆転移という言葉を使用したのは「精神分析の今後の可能性」（Freud, 1910/2007）においてである。逆転移を、患者の影響によって、治療者の無意識的な感受性の上に生じるものとし、自己分析によって逆転移を克服しなければならないと述べた。治療者は、患者のために鏡として役立つことを期待され、個人的感情を治療に持ち込まず、患者の無意識的欲求に対して中立性を保持することが求められていた。しかし、面接場面で治療者が鏡のように機能することは不可能であり、逆転移は必ず生じ、治療者は逆転移を克服することはできなかった。

その後、1940年代と1950年代に、Balint & Balint (1939), Winnicott (1949), Heimann (1950) など多くの革新的な関係論者は、逆転移は好ましくないという態度を根本的に変えた。Balint & Balint (1939) は分析状況を、患者の転移と分析者の逆転移の相互作用の結果であり、それぞれ相手が自分に対してもつ転移から引き出された反応によって複雑化するものと定義した。Winnicott (1949) は逆転移とされた患者への分析家の憎しみを「客観的で正当な憎しみ」として取り上げた。Heimann (1950) は逆転移を、患者を理解する

手段として定義づけ注目された。さらに、1970年代から逆転移が患者の心理過程に反応して生じるという、逆転移の新しい理解が広まり、その後も、多くの分析家が逆転移の概念について再考し、Sandler, Holder, Dare (1970) は「役割対応性」、King (1978) は「患者のコミュニケーションへの分析家の情動的反応」として逆転移を理解し、Searles (1979/1991) は、患者の治療的欲動によって分析家が癒されることに言及している。

1990年代以降、わが国でも、逆転移についての再検討する研究が増加している（成田，1997）。これは、逆に、逆転移が治療者の心の中の大きな部分を占めていることを表しており、分析家が患者の人生に深く巻き込まれている事実を証明している（Hamilton, 1996）。

また、アメリカにおける精神分析のパラダイムの変化により、間主観性理論や関係論という二者の相互交流や関係性を重視した理論が登場した。そうした流れの中で、転移-逆転移関係という表現も増え、共転移 *contransference* (Orange, 1995) という概念や、一者心理学的な捉え方である逆転移という言葉自体を使わないという傾向すら出てきた。そして、現在は学派によって多少の違いがあるものの、逆転移は治療者側のものというより、クライアントと治療者の二者関係において生じるものであるとする捉え方が主流となっている。ここで、空想が逆転移の一部であるならば、その考えを拡張すると、心理臨床家の空想はクライアントとの相互交流の産物として捉えられよう。

逆転移の概念が空想の概念と同様に多義的であるが故に、逆転移の範囲を明確にすることはできない。また、治療者の感情が患者の心の状態を反映しているのか、治療者自身の体験から生じているものかを識別することは困難であるため、これまで逆転移の定義が一貫性のないものになっていることが指摘されてきた（Balint & Balint, 1939）。現在は前者と後者を明確に分離することは不可能であるから、それらは否定される傾向にあるが、それでも逆転移を分類するという考え方は存在する。例えば Klein 学派や古典的 Freud 派の中には「狭義の逆転移」と「広義の逆転移」というように分類した上で、広義の逆転移は二者関係において生じるものを示し、狭義の逆転移は治療者側によってもたらされているものとしている。これは Kernberg (1965) が逆転移を古典的 (classical) 逆転移と、全体的 (totalistic) 逆転移と分類した流れからきていると思われる。前者の古典的逆転移はその名の通り、Freud が治療の邪魔になるため克服すべきものとして捉えたものだが、広義の逆転移は治療の道具として活用できるものとして捉えられている。どのようにして逆転移を狭義と広義に分類するのか、その方法論は明確ではないが、これらの考え方には、クライアントとは無関係な治療者側の逆転移というものが存在することを想定している。逆転移というものを関係論や間主観的な文脈で捉えるという視点がさまざまな学派で広がりを見せてはいるものの、やはり逆転移という言葉にはクライアントとは隔離した分析家の個人的な反応が存在するという一者心理学的な考えが、現在も色濃く反映されていることが伺えるのである。

一方、面接場面での分析家の心的作業や分析家自身の空想に焦点づけた研究は、これまではあまり見られなかった。その中で精神分析家が精神分析治療の中で空想することによって生じていることを分析家の心の動きから検討する研究が、空想という言葉で表現さ

れているわけではないが、いくつかみられるようになってきている (Jacobs, 1993; Ogden, 2001; Bromberg, 2006)。そこには「空想すること」にどのような意味を持たせ、何に焦点づけているのかの違いがある。Jacobs (1993) はセッション場面における自身の内的経験を逆転移の文脈で捉えている (Jacobs, 1993)。Ogden (2001/2008) は Bion (1962a/1999) が使用した用語である「もの想い」の状態に空想を含めており、無関係な自身の空想を分析関係に戻し、隠喩を通してクライアントの無意識的体験を知る手がかりとしている事例を挙げている。Bromberg (2006) も同様に、自身の空想をクライアントとの分析関係の文脈に戻し、さらにクライアントと空想を共有し、解離とエナクトメントの関係について論じている。それらの内容には、どのような空想が生じたのか、また空想することがクライアントとの間でどのように展開していくのかについて、それぞれの分析家の理論の解釈とともに記述されている。そして、当事者だけが経験できる、その瞬間の空想することが感じられる記述がなされている。

Bromberg (2011/2014) は「変化が起こるのは内容を探索していく関係的プロセスのためなのであって新しい内容を発見すること自体のためなのではない」と述べている⁷⁾。このことは、無意識的空想が意識化され発見されることによって変化が起こるのではなく、二者の絶え間ない相互交流によって内容を探索していける状況を維持しようとする関係的プロセスが変化を促す要因になっていることを示していると考えられる。その関係的プロセスに、心理臨床家の「空想すること」が寄与する可能性については1節で論じた。

2-2-2 逆転移の概念の広がり

Hamilton (1996/2008) は、逆転移に関する精神分析家へのインタビューや討論から得たこととして、逆転移の概念の使用について、理論的な志向性によってある程度の共通項があるものの、全般的には一貫性が欠けていると述べている。逆転移に関する議論は文化や分析家の性格による違い、一時的な逸脱や障害、普通の会話の一部など多様な広がりを見せており、何をもって逆転移と捉えるのが複雑化しており、逆転移の概念は空想の概念と同様に、多義的であり、かつ個人的なものである。Hamilton は逆転移に関する精神分析の文献を3つの観点から検討している。第1の観点は、患者に対する分析家の情緒的あるいは情緒的反応としての逆転移であり、最もよく知られているものである。第2の観点は分析家の認知プロセス、理論の使用、そして同僚からの学習としての逆転移である。そして、第3の観点は、分析家の遊びの使用を含む想像上の出会いとしての逆転移である。

これまで逆転移は、無意識的に治療者に生じているものであるとされていたが、上記の分類には、意識に近い部分、つまり前意識の層で活動している空想も含められており、意

7) Bromberg (2011/2014) は、Lyons-Ruth & the Boston Change Process Study Group が論じている「患者と治療者の間の相互交流の中で、認識の新しいあり方、あるいは互いのイニシアティヴをうまく合わせていく新しいあり方を、二人が互いに模索する中から、思いがけず現れるものなのである。」という部分を引用し、関係的プロセスを強調している。思いがけずに現れる変化とは、「アクチュアリティ」の視点を抜きにしては語れないものと考えられる。

識レベルでの逆転移の概念の広がりを感じられる。まず、第2の観点は筆者自身の体験を例にすれば、文献を読んだり論文を書いたりしながら考えたことや、前日に参加したセミナー、あるいは同僚との議論などのさまざまな刺激が、セッション中に何らかの影響を与えていると感じることなどが挙げられる。それらはセッションのある場面で思い出されるような場合から、しばらく経ってから臨床素材と結びつきその影響を感じる場合までさまざまである。第3の観点は、治療者に思い浮かんだ映像から何らかのストーリーが展開されていくようなことなどが挙げられる。

このように前意識の層で活動している空想を逆転移として取り上げることによって、空想の意味をより多義的に捉えることができると考えられる。そこで前意識の層で活動している空想について検討することとする⁸⁾。

2-2-3 想像的反応としての逆転移

Hamilton (1996/2008) の第3の観点である想像的反応は、第1の観点である情動的側面と第2の観点の認知的側面の相違を明らかにするうちに、思考の第3の中に導かれたものである。それは分析家の遊びの使用を含む分析家と被分析家の想像上の出会いとしての逆転移であり、分析関係の中で分析家が自分自身を使う際には、前意識における想像が中心的な役割を担うということを示唆していた。Hamilton は、この前意識の層は分析家の専門家としての各個人の特徴を最も際立たせるものであるとして、そこに関心を向けている。そこでは分析家が意識的に空想しており、それぞれの分析家のありようが見えてくる。高橋 (2008) は、治療者の専門性は、前意識におけるセラピープロセスの中でその時その場のタイミングにて直感的に使われ、無意識と意識の調整役として機能するその方法に、各個人の特徴が見られる可能性があるとして述べている。

Hamilton によれば想像上の出会いとは、転移-逆転移からすると「患者が心の中の劇を演じることのできる舞台を分析的設定が提供し、患者は自分の転移を演じる（プレイ）自由を与えられ、分析家は想像して患者を理解するために、自分の逆転移を使用する」というものである。Wollheim (1974) が他人の中に自分を思い入れてその人の日常的な出来事を演じきることを、想像するプロセスというものが同一化をもたらすというように述べていたことを手がかりに、想像が精神分析におけるプレイ（演じること）の要素とつながっていることについて論じている。さらに、プレイの別の意味として Winnicott (1971/1979) の「分析家の遊ぶ能力から『ふたつの遊び領域の重なり』を創り出す」ことにも触れている。これは子どもとのプレイセラピーにおいて、子どもとセラピストが遊びを通して、患

8) 前意識とは、Freud の局所論 (Freud, 1900/2011) においては意識と無意識の間に存在するものであり、少し注意を向けることによって意識化できる領域である。ここで Hamilton (1996/2008) による第3の観点と、その際紹介された Heimann (1977) が想像を認識プロセスとして分類したことの2点について、まとめて記述する。その内容には引用のまま「想像」という言葉で表現されている箇所が多く存在するが、「想像」を「空想」と重なる概念と捉え、それらを「空想」として考察したい。

者の世界を演じるものであると考えると分かりやすい。そしてそのことはプレイセラピーに限られるものではなく、心理面接においてもまた分析家の空想と患者の空想が重なりを見せながら展開していくものであると思われる。例えば、患者の架空の話（空想）に分析家も合わせて空想したとし、ストーリーが作り上げられていくような場合が挙げられる。この想像上の出会いは、空想が両者の言語化によって共有されない場合であっても、それぞれが空想を膨らませることによりその重なりが生じるということで、両者の出会いが生まれるというように思われるのである。

2-2-4 認識プロセスとしての逆転移

Hamilton は逆転移の文献を上記の3つの観点から分類することを有用とした上で、さらにそれらの文脈で収まり切らないものとして、Heimann (1977) が逆転移のプロセスに認識プロセスを加え、想像的反応を認識プロセスとして分類したことを取り上げている。逆転移の認識プロセスの分類は、一般的にはこれまで逆転移として捉えられていなかったものを含んでおり、空想の機能を拡張するものと思われる。この認識プロセスには、分析家として患者の話を「傾聴する観察者」、患者にとっての「特別な対話の相手」、分析家が自身をスーパーヴァイズする「スーパーヴァイザー」という、3つの認識的態度を取るものが含まれている。この3つの認識的態度は、職業的役割として誰もが保持しているものであると考えられる。しかしそれは、分析家個人のパーソナリティや、また対象となる患者によって強められたり弱められたりして異なるものになることが考えられる。まず分析家個人のパーソナリティについて言えば、患者との適度な距離を保ち、俯瞰して出来事を捉える認知的傾向がある分析家は、この3つの認識的態度を特に取る可能性があるのかもしれない。また、分析家が患者といて感じるある瞬間の緊張度の高さから、3つの態度のどれかを取りながら自己の状態を保とうとすることも考えられるだろう。さらに患者に巻き込まれないように分析家が防衛的になっているときは、プロセスの途中ではなくセッションの始まりから、「傾聴する観察者」という認識的態度によって面接に臨むのかもしれない。

3つの認識的態度の中でも、「スーパーヴァイザー」という認識的態度は、患者の臨床素材と自分自身の情動的反応を吟味するだけでなく、精神分析理論と技法についての関心の程度にも左右される (Hamilton, 1996/2008)。Casement (1973/1991) は、分析家自身の心の中にスーパーヴァイザーを置くという言い方で、実際のスーパーヴァイザーを内在化し、さらにその存在を自立したものにしていく分析家の成長過程について述べている。ただ、Casement は「心の中のスーパーヴァイザー」を逆転移としては定義していない。むしろそれは逆転移反応を含め吟味するためのものであるという印象を受ける。

これらの認識的態度のどれを患者に向けているのかを改めて探索することは、患者と分析家の関係性をより明確に理解することが可能ではないかと思われる。また、認識的態度による空想は無意識的空想や意識的空想の動機に気づくなど、生じた空想を外側から認識するというメタ的な働きとして言い換えられるかもしれない。そして、分析家が面接場面

で自己状態を保つことに貢献する可能性があり、すなわちそれは空想が分析家自身の自己調整として機能することが考えられる。

3. まとめ

1節では、面接場面で心理臨床家が空想することによって何が生じているのかをアクチュアリティという一つの視点から検討した。そこで「空想」を「リアリティ」とし、「空想すること」を「アクチュアリティ」として区別することによって、クライアントとの関わりのなかで生じていることが、「関係性」「持続性」「当事者性」などの「アクチュアリティ」の視点を抜きにしては語れないことが明らかになった。また、「リアリティとアクチュアリティの二重現実」(木村, 1994b)として、「空想」と「空想すること」を臨床場面から見ていく必要性が伺えた。さらに、心理臨床家の感覚の関与と自己調整という2つの視点から心理臨床家が空想することをプロセスで捉えた結果、心理臨床家が空想することがクライアントへの共感を促すことや、クライアントとの非言語的相互交流に影響を及ぼし両者の関係の安定性に貢献する可能性が考えられた。一方で、空想することへの傾倒によって、心理臨床家としての役割の維持が困難になるリスクがあることも示唆された。

2節では、精神分析における空想の概念と逆転移の概念を取り上げた。Freudによれば空想にはさまざまな現れ方がある(Freud, 1907/2007, 1908a/2007)、空想は欲望成就(Freud, 1908a/2007)や防衛的な側面として生じるだけでなく、空想の中で現実の体験を加工することが体験を構造化する機能を担っていてもいる(総田, 2001)。一方 Freud (1908a)は、白昼夢が意識的空想から無意識的空想に変化すると病理的なものになることがあると論じており、空想に傾倒しすぎることは病理的な領域に行かないまでも、現実や他者との境界が曖昧になることがあると考えられた。これは1節で述べたことと重なる部分である。その後 Isaacs (1952/1979)によって無意識的空想は精神分析学派では個人の内面を理解する上で重要な素材を提供するものとされてきたが、現在は精神分析の基本概念である無意識を意識化することだけに留まっていはいない。逆転移の捉え方の変化にも見られるように、二者の相互交流や関係性を重視した流れが主流となっている。つまり、これまで個人の内面を探究する中で発見することができた新しい内容という「もの」が重要視されてきたのが、二者が関係する「こと」に力点がシフトされていったと考えられる。

本論文では、心理臨床家の空想を逆転移の一部として位置付け、その中でも前意識の層で活動している空想を取り上げた。この意識に近い部分の空想からは、心理臨床家それぞれのスタンスという個別性や空想への主観的で能動的な態度が伺える。つまりそれは、面接場面でクライアントとの相互交流において、より積極的に心理臨床家が空想するという行為に向かう側面ではないだろうか。それらのことを含め、筆者は心理臨床家が空想することについてさまざまな観点から捉えることが、治療に役立つ可能性があると考えた。

また本論文では、精神分析学派の理論の変遷とアクチュアリティの視点によって、心理臨床家が空想することを考察する重要性が強調された。しかし、心理面接に貢献するにはさらに研究を進め「空想」と「空想すること」の二重現実から見えてくるものを具体的に

示す必要があると考えられる。また、アクチュアリティの視点に含まれる身体性は、面接場面において注目すべき点であると思われる。それらを今後の課題としていきたい。

文献

- Alain (1926). *Système des Beaux-Arts*. 桑原武夫訳 (1941). アラン芸術論集. 岩波書店.
- Bacal, H. A. (2006). Specificity theory conceptualizing a personal and professional quest for therapeutic possibility. *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 1 (2), 133-155.
- Balint, A. & Balint, M. (1939). On transference and countertransference. *International Journal of Psycho-Analysis*, 20, 223-230.
- Bebee, B. & Lachmann, F. M. (2002). *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions*. Hillsdale, NJ: Analytic Press. 富樫公一監訳 (2008). 乳児研究と成人の精神分析——共構築され続ける相互交流の理論. 誠信書房.
- Berger, D. M. (1987). *Clinical Empathy*. Jason Aronson. 角田豊・竹内建治・安村直己・西出克泰・藤田雅子訳 (1999). 臨床的共感の実際. 人文書院.
- Bergson, H. (1934). *La Pensée et le Mouvant*. 原章二訳 (2013). 思考と動き. 平凡社.
- Bion, W. R. (1962). *Learning from Experience*. Heinemann Medical. 福本修訳 (1999). 経験から学ぶこと 精神分析の方法 I ——セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局. pp. 3-118.
- Bromberg, P. M. (2006). *Awakening the Dreamer: Clinical Journeys*. Mahwah, NJ: The Analytic Press. London.
- Bromberg, P. M. (2011). *The Shadow of the Tsunami and the Growth of the Relational Mind*. Routledge. 吾妻莊・岸本寛史・山愛美訳 (2014). 関係するところ——外傷、癒し、成長の交わるところ. 誠信書房.
- Buber, M. (1923). *Ich Und Du*. Leipzig Insel Verlag. 田口義弘訳 (1978). 我と汝・対話. みすず書房. pp. 5-179.
- Casement, P. (1973). *On Learning from the Patient*. London: Routledge. 松木邦裕訳 (1991). 患者から学ぶ——ウィニコットとビオンの臨床応用. 岩崎学術出版社.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual in empathy: Evidence for multidimensional approach. *Journal of Personality and Social psychology*, 44, 113-126.
- Deleuze, G. (1981). Francis Bacon: Logique de la Sensation Editions de la Difference 山縣熙訳 (2004). 感覚の論理——画家フランシスベーコン論. 法政大学出版局. p. 34.
- 藤岡喜愛 (1983). イメージ——その全体像を考える. 日本放送出版協会.
- 藤山直樹 (2002). 幻想 phantasy, fantasy 小此木啓吾編 精神分析事典. 岩崎学術出版社. pp. 123-124.
- Freud, A. (1936). *The Ego and the Mechanisms of Defence*. New York: International University Press. 外林大作訳 (1985). 自我と防衛. 誠信書房.
- Freud, S. (1887-1904). J. M. Masson (Ed) (1986) *Briefe an Wilhelm Fließ, 1887-1904* Frankfurt am Main, Fischer Verlag. 河田晃訳 (2001). フリースへの手紙. 誠信書房.
- Freud, S. (1899). *Über Deckerinnerungen*. 角田京子訳 (2010). 遮蔽想起について フロイト全集 3. 岩波書店. pp. 327-351.
- Freud, S. (1900). *Die Traumdeutung*. 新宮一成訳 (2011). 夢解釈 フロイト全集 5. 岩波書店.
- Freud, S. (1907). *Der Wahn und die Traume in W. Jensens "Gradiva"*. 西脇宏訳 (2007). W・イエ

- ンゼン著『グラディーヴァ』における妄想と夢 フロイト全集 9. 岩波書店. pp. 1-107.
- Freud, S. (1908a). *Hysterische Phantasien und ihre Beziehung zur Bisexualität*. 道旗泰三訳 (2007). ヒステリー性空想, ならびに両性性に対するその関係 フロイト全集 9. 岩波書店. pp. 241-250.
- Freud, S. (1908b). *Der Dichter und das Phantasieren*. 道旗泰三訳 (2007). 詩人と空想 フロイト全集 9. 岩波書店. pp. 227-240.
- Freud, S. (1910). *Die zukünftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie*. 小此木啓吾訳 (2007). 精神分析療法の今後の可能性. フロイト著作集 9. 人文書院. pp. 44-54.
- Freud, S. (1918). *Aus der Geschichte einer infantilen Neurose*. (2010). 新宮一成訳. 症例「狼男」 フロイト全集14. 岩波書店.
- Greenson, R. R. (1967). *The Technique and Practice of Psychoanalysis*. Vol. I. New York: International Universities Press.
- Hamilton, V. (1996). *The Analyst's Preconscious*. The Analytic Press. 岡田暁宣・黒河内 美鈴・小林譲・崔鳳春・阪田啓子・津田真知子・長田道・細澤仁訳 (2008). 分析家の前意識 諸学派65人の. インタビューによる研究. 岩崎学術出版社.
- Heimann, P. (1977). Further observations on the analyst's cognitive process. In M. Tonnesmann (Ed.) (1989). *About Children and Children- No-Longer*. London: Tavistock /Routledge, pp. 295-310.
- 乾敏郎 (2009). イメージ脳. 岩波書店.
- Isaacs, S. (1952). The Nature and Function of Phantasy 北山修訳 (1979). 幻想の性質と機能. 小此木啓吾編 精神分析・フロイト以降 現代のエスプリ No. 148. 至文堂 pp. 101-112
- Jacobs, T. (1993). The inner experience of the analyst: Their contribution to the analytic process. *The International Journal of Psychoanalysis*, 74, 7-14.
- 皆藤章 (2007). 並行面接について思うこと. 臨床心理事例研究 京都大学大学院教育学研究科 心理教育相談室紀要, 34, 27-29
- 神田橋條治 (1992). 治療のこころ 第二巻 精神療法の世界. 花クリニック神田橋研究会.
- Kernberg, O. F. (1965). Notes on countertransference. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 13, 38-56.
- 木村敏 (1994a). 偶然性の精神病理. 岩波書店.
- 木村敏 (1994b). 心の病理を考える. 岩波書店.
- 木村敏 (1997). リアリティとアクチュアリティ. 木村敏 (2001). 臨床哲学論文集 (木村敏著作集第七巻) 弘文堂. pp. 287-316.
- 木村敏 (2015). からだ・こころ・生命. 講談社.
- King, P. (1978). Affective response of the analyst to the patient's communications. *International Journal. Psycho-Analysis*, 59; 329-334.
- 木下孝司 (1999). “空想”. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁増算男・立花政夫・箱田裕司編. 心理学辞典. 有斐閣.
- 北山修 (1979). 解説 S・アイザックス 幻想の性質と機能. 小此木啓吾編 精神分析・フロイト以降 現代のエスプリ No. 148 至文堂, pp. 113-114
- 北山修 (2004). 改訂錯覚と脱錯覚. 岩崎学術出版社.
- 小林隆児 (2015). 精神療法におけるエヴィデンスとは何か. 小林隆児・西研編 人間科学に

- おけるエヴィデンスとは何か. 新曜社, pp. 229-271.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2003). 空想概念の多次元尺度構成法を用いた定義化. 筑波大学心理学研究, 26, 229-233.
- 松下姫歌・村上碧海 (2010). 空想への心的態度とフロー体験および精神的健康感との関係 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 59, 83-92.
- Merleau-Ponty, M. (1945). *La Phénoménologie de la Perception*. Paris. Editions Gallimard, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄 訳(1974). 知覚の現象学 2. みすず書房.
- Moore B. E. & Fine, B. D. (Eds.) (1990). *Psychoanalytic Terms & Concepts*. London: Yale University Press. 福島章監訳 (1995). 精神分析事典. 新曜社.
- 成田義弘 (1997). まえがき. 氏原寛・成田義弘編 転移／逆転移—臨床の現場から—. 人文書院.
- 新村出 (2008). 広辞苑 第六版. 岩波書店.
- 西研 (2015). 人間科学と本質観取. 小林隆児・西研編 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社, pp. 165-185.
- Ogden, T. H. (2001). *Conversations at the Frontier of Dreaming*. Jason Aronson. 大矢泰士訳 (2008). 夢見の拓くところ. 岩崎学術出版社.
- 岡野憲一郎 (1999). 新しい精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- 岡野憲一郎 (2013). 脳から見える心. 岩崎学術出版社.
- 小此木啓吾 (2003). 精神分析のなかのウィニコット. 妙木浩之編 ウィニコットの世界 現代のエスプリ別冊 至文堂, pp. 82-104.
- Orange, D. M. (1995). *Emotional Understanding: Studies in Psychoanalytic Epistemology*. New York: Guilford Press.
- Person, E. S. (1995). *By Force of Fantasy: How We Make Our Lives*. New York: Basic Book. 浅尾泰訳 (1997). ひととはなぜ空想するのか. 翔泳社.
- Rycroft, C. (1968). *A critical dictionary of psychoanalysis*. 山口泰司訳 (1992). 精神分析学辞典 河出書房新社.
- Sandler, J., Holder, A., & Dare, C. (1970) Basic psychoanalytic concept: IV. countertransference. *British Journal of Psychiatry*, 117, 83-88.
- Searles, H. F. (1979). *Countertransference and Related Subjects.: Selected Papers*. New York: International Universities Press. 大森和宏・佐藤健司・西口芳伯・馬場一彰・普天間健・堀川典宏・松本雅彦共訳 (1991). 逆転移 1. みすず書房.
- Singer, J. L. (1966). *The Inner World of Daydreaming*. New York: Harper and Row. 秋山信道・小山睦央訳 (1975). 白日夢・イメージ・空想——幼児から大人までの心理学的意義. 清水弘文堂.
- 新宮一成 (2010). フロイト全集 3 編注. 遮蔽想起について (24). 岩波書店. p. 471.
- 総田純次 (2001). フロイトにおける空想の概念. 倫理学研究, 31, 72-73.
- Stolorow, R. D. & Atwood, G. E. (1989). Unconscious and Unconscious fantasy: an intersubjective developmental perspective. *Psychoanalytic inquiry*, 9 (3), 364-374.
- 館直彦 (2013). ウィニコットを学ぶ. 岩崎学術出版社.
- 高橋哲郎 (2008). 監訳者まえがき Hamilton, V. 高橋哲郎 監訳 分析家の前意識. —諸学派 65人のインタビューによる研究 岩崎学術出版社. pp. ii-iii

- Winnicott, D. W. (1935). The Manic Defence. In *Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, New York : Basic Books, 1974, pp. 129-144
- Winnicott, D. W. (1949). Hate in the countertransference. *International Journal of Psycho-Analysis*, 30, 69-74.
- Winnicott, D. W. (1955-56). Clinical varieties of transference. In D. W. Winnicott (1958) *Collected papers: Through Paediatrics to Psycho -Analysis* London, England: Tavistock Publications., (pp. 295-299). 1958.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. New York: Basic Books. 橋本雅雄訳 (1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.
- Witham, A. (1999). Dreaming and daydreaming. In S. Johnson & S. Ruscynski (Eds.), *Psychoanalytic Psychotherapy in the Independent Tradition*. London: Karnac Books. 倉ひろ子訳 (2007). 夢見ることと白昼夢を見ること. 精神分析的な心理療法の現在 ウィニコットと英国独立派の潮流. 岩崎学術出版社. pp. 141-155.
- Wollheim, R. (1974). *On Art and the Mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.